

IV 我が懐かしき故郷高島そして同胞たちよ：感謝をこめて

松 林 紀 行

アジア近代化研究所理事・明星大学経済学部特任教授

長崎県野母（のも）半島に広がる緑なす山並み、さわやかに響き渡る教会の鐘の音、くっきりと浮かぶ軍艦島 - 名残尽きぬ思いを残し、筆者たち高島中学校3年生527名は昭和40年3月24日高島を巣立った。あれからもうすぐ50年。人生の数々の荒波にもまれながら、筆者は40年の会社生活をなんとか全うして、今東京近郊の大学に勤務している。最近しばしば足をとめ瞑想している自分に気づく。筆者が育った島、自分たちを静かに育み優しく見守ってくれた故郷、高島を亡き父の姿と重ねて懐かしむ日々が多くなった。

このレポートでは、ちょうどいい機会でもあり、自分の故郷、高島を顧みることにしようと思う。長崎県西彼杵郡高島町高島。長崎の大波止（おおはと）港から15km沖合にあり、昭和30年代は炭鉱でとても栄えた島だった。当時は300人ほどが乗船可能な高速船で港から一直線に走っても1時間強かかった。

歴史を見ると、江戸時代に五平太なる領民によって日本で最初に石炭が発見された由緒ある島で、明治初期にはグラバー邸で有名なかの貿易商グラバー氏が、佐賀藩と合同で蒸気機関を使った初の洋式採炭法を開始し、その後例の岩崎弥太郎三菱財閥へ譲渡された。「高島炭鉱」は東洋一の深さ（海底3,000m）と面積を

ほこる海底炭鉱であった。軍艦島として有名な端島（はしま）も同島の沖合に弟分として鎮座していた。確かに中学、高校の日本史にも高島は登場したが、それは炭鉱労働者の酷使や虐待による「高島炭鉱事件」として負のイメージで記載されていただけだった。

経済の近代史では、高島は良質な粘結炭を産出し、製鉄業や電力など戦後復興の基幹産業を燃料、原料源として力強く支え、けん引した。結果として数々の好景気いわゆる「神武景気」から「いざなぎ景気」まで戦後20年の戦後の奇跡復興を実現させた、さながら蒸気機関車のようであった。

蒸気機関車といっても面積はたったの1km²強。その狭すぎる島にピーク時の昭和43年（1968年）には18,000人を超える人々が所狭しと働き暮らしていた。そこはまさしく、日本の高度経済成長を推進する最先端の現場 - 「戦場」であったのだ。

島全体でひとつの町、高島町を形成していたので町単位では面積はつい最近まで日本最小、人口密度は日本断トツ、いや世界一の町であり島だった。しかしながら、昭和61年の閉山後は逆に430人程度まで激減衰退し、日本で最も絶対人口数の少ない町になってしまった。（その後

、2005年に長崎市に編入され町は消滅。
) そんな島で、筆者は青春時代を過ごした。

高島は、日本の遙か南西の小さな孤島にもかかわらず、石炭エネルギーを頂点とする高度経済の栄華を存分に謳歌していた。電気、上下水道は当時すでに完備され、無償で支給されていた。トイレも水洗であった。住居は、島全体を真っ白な無数の鉄筋コンクリート造の高層アパート(当時は8階建て)が連立していた。当時、島ではすでに住民のほとんどが最先端の三種の神器(といっても車は不要だった)を完備し、近代的生活を満喫していたのだ。

勿論、道路も権現山のとっぺん近くまで幾重にも舗装され、小学校や中学校の校舎、校庭、体育館も新しかった。総合病院、市場、消防署などすべてインフラが整備された企業城下町を形成していた。当時は冷蔵庫、テレビ、洗濯機等の新しい白物が、日常茶飯事的に、各家庭に競うように、次々に取り入れられ無数のアンテナが針山のごとき様相だった。

島中に坂本九、中尾ミエ、森山加代子たちのポップスやベンチャーズの音楽が流れていた。特に人の往来が激しい船着き場では、送迎の度に賑やかな「東京オリンピック音頭」や「上を向いてあるこう」あるいはショパンの「別れの曲」「

真珠貝の唄」などが大音響で流れ、船の物悲しい汽笛とドラの音とが相まって人々の出会いや別れを一層効果的に演出していた。さながら映画の一コマのようだった。

青果市場や生協も豊富な品と新鮮な野菜、魚で活況だった。狭い島のせいかもしれないが人々の喧騒と往来で慌ただしく賑やかだった。

筆者達団塊世代は、当時小中学生で数だけははちきれそうな勢いだった。そして遊びや行事となると島の主人公だった。特に夏休みの野山に駆け上がってトンボ、セミ取り 笹竹から小刀づくり、浜辺での水もぐり、台風到来となると岸壁際にせりだして度胸試し、冬はけり馬、喧嘩コマそして恒例の野球大会と地区対抗の運動会。いつも真剣に夜遅くまで遊びふけた日々だった。

また学校帰りの楽しみに 各地区に設けられた共同大浴場に集まり、「今日も稲尾が完投したんよ。中西も豊田もホームラン打ったらしか」「吉村道明がまたシャープ兄弟にまけよった。ほんなこつ日本人として恥ずかしか」等、その日の野球(西鉄ライオンズ)やプロレス(力道山、豊登、芳の里)の解説、相撲取り組みの実況、女の子など身振り手振りで遊び、盛り上がった。



高島の標準社宅アパート（RC造）*1 高島鳥瞰写真（昭和45年）*2

ポツンと離れた島であったせいも、都会の雰囲気や世情に揉まれることなくひたすら青春を謳歌した。まさに俗世間から離れた海上都市国家（アクアポリス）であり、誰からも邪魔されない究極の楽園であった。少年たちはまた皆楽しい仲間だった。島では皆大家族の一員みたいで、恐い父ちゃんや優しい母ちゃん、姉ちゃんや兄ちゃんたちのあだ名までよく知っていた。船室や埠頭で、市場で、映画館で、学校の運動場や病院でお互いよく集まっていたのである。また年に一度の運動会と盆踊りは、これまたメインイベントで島をあげてのお祭りだった。皆生き生きとして活況あふれる島だった。

そういえばこんな楽しいこともあった。ある日いつものように件の浴場へ出かけた。いつもいる連中の声がしない。おかしいなと思いながら入口の扉を力強くあけた。なんとその脱衣場には、平日頃ひそかに憧れていたKちゃんが、あられもない格好で、つまり真っ裸で今まさにタオルを取ろうと思いきり開脚姿で突っ立っていた。お父さんと一緒だった。

目が合ってしまった。すぐ点になった。いつもの「オスッ」も言えない。ペロが凍って顔が固まった。その後どうやって風呂場まで掛けて飛び込んだか記憶がない。生涯忘れられない僕だけの思い出だ。

また、権現山のとっぺんでは中学3年のガキ大将たちが「番長」の座を争ってよく決闘していた。どこでもなんでも真剣勝負の時代だった。

世間から遠く隔離された島にいと、楽園は確かに閉鎖的な大家族主義、排他主義、劣等感を生み出す負の面も多々あった。たまに船に乗って長崎の町に着くといつもの快活、滲刺さが萎えて、よそよそしく縮こまっていた。島の中ではわんぱく小僧でこわいもの知らずであっても、整然として路面電車やバス、タクシーが行きかう内地の街に憧れと畏敬の念をいただいていた。服装から身の回りの物、はては方言までなにかしら子供ながらに違和感、疎外感を感じたものだ。青春時代はなにかと多感だった。

ところで、大人たちにとって高島は既

述のとおり高度経済成長をけん引する最先端にしてとても危険な戦場であった。毎月のように地下では落盤事故やけい肺患者が続出し、地上では病院が臨戦態勢を敷いていた。野戦病院のようにいつも険しい表情をした医師や看護師が走り回っていた。父親が突然亡くなり人知れずこっそり島から出て行く同級生や、親族に世話になっている母子家庭の生徒たち、弁当を持参できない生徒たちなど少し落ち着いて振り返ると多くの犠牲も払われていた。陰の部分もとても大きかった。

親父たちは毎日朝早く炭鉱（ヤマ）の立抗まで歩き、一日中熱くじめじめした坑道内で例えば採炭開発・技術・施工調査などを担当管轄して夜遅くに帰宅した。よく職場仲間を連れてきては家で酒盛りをし、大勢で夜通し喧々囂々と声を張り上げていた。職住一体だった。また毎年5月1日のメーデーになると、はるか遠方から船でやって来て赤旗を掲げてマイクで絶叫する沢山のオルグ活動家たちとピケを張って戦っていた。お互いに高島と職場を守って争っていたわけだ。時に血だらけになって帰ってきたが、半ばこれも恒例となった。人知れず皆苦勞をしていたのである。

筆者は、北海道大夕張という大自然に囲まれた土地で生まれ育ったが父の転勤にあわせて日本を一気に南下し高島で少年時代を過ごした。小学校2年の夏休みの転校から中学卒業までの約8年間、大人の感覚ではたいしたことはないが大原野で

育った分だけ余計に長く閉塞感を感じた。とても楽しかったけれど、その一方で寂寥感や孤独感も人一倍あった。それが高島を積極的に去る動機となった。

なんで俺たちはこんなはずれた島にいるのだろう。市内の学生たちは皆「ハイカラ長髪」で髪をなびかせて颯爽と大通りを闊歩していた。かっこいい！それなのに、なに故に俺たちは「ボンズ丸刈り」でダサイのか、ようし、中学出たら絶対に早くこの島から出よう。この島から抜け出すことこそ自分の人生が始まるのだと、かたく信じて疑わなかった。

島は一つの町を形成し三菱鉱業一企業の城下町であった。一島一町一企業。灰色のボタ山。泥臭く汗臭くて、真夏となれば野生のヒル、ナメクジ、ムカデ、蜘蛛、ヤモリ、はては蛾の群れが繁殖し亜熱帯特有の魍魎魍魎が島の道端や丘陵の草むら一面に跋扈する。伏魔殿さながらであった。

実はそのころ、すでに日本ではエネルギー革命が浸透し、ついに石炭から石油の時代へ大きく舵が切られ始めていた。石炭産業の大崩壊が始まっていたのだ。学校では福岡県でいち早く閉山になった炭鉱、特に田川、飯塚、直方から続々と転校生が増えていった。一学年13クラスにもなった。高島はエネルギー産業の決戦の場、最後の砦のようだった。うすうす斜陽化していきたくらうとは思っていた。やがて石炭高島は有終の美を迎える。

昭和40年3月、中学を卒業して意気揚々と高島を去った。末期を察していたのか

定かではないが沈没する前に去っていた。さよならも言わずに。後ろを顧みずただひたすら前だけを見て人生の船出、明るい未来へと島を出た。夢や希望を胸いっぱいふくらませて。

筆者達少年は あたかも多くの反抗期の少年のように 口をへの字にしたままプイッと出て行った。それが当たり前のよう。そして、高島も頑迷な父親然としてなにも声かけず黙々と仕事を続けるのみだった。あたかも毎日顔中真っ黒になって汗だくに働く炭鉱マンを彷彿とさせた。高島は、自らの威厳を内に秘めつつ、後に大きく世に語られることになる偉業や功績など自ら一言も語らなかった。絶えず寡黙に徹していた。

何が恥ずかしかったのだろう。何がつ

まらなかったのだろう。テレビから見える都会の風景。ビルや高速道路を歩きかう車や電車。背広姿で颯爽と歩くハイグレードそうな人たち。人気歌手が歌い、さも楽しそうな歌謡番組。軽快な音楽。ラジオから流れる「百万人の英語」など、どれも実際見たことも触れたこともない別次元の世界、憧れと夢のような世界が島の向こう側にある。早く訪れて彼らと一緒に希望に満ちた都会で生きたい。正に憧れそのものだった。

時は過ぎ、社会人となった筆者は大都会や海外で揉まれながらも一生懸命働き続けた。仕事の達成感や充足感もそれなりにあった。

そうした頃、突然あの報に接した。



顔を真っ黒にして働く坑夫*3

昭和61年、高島がテレビや新聞で大きく取り上げられた。三菱鉱業高島がついに

閉山となるとの報道だった。約100年もの間、日本の戦後復興に貢献し続けた孤島が映し出された。久しぶりに見る高島だった。その面影は少年時代とさほど変わらない物静かな感じだった。でもよく見ると筆者には「よいしょっ。そろそろオイは疲れたけん。休むばい。ゆっくり休むばい」とそっと囁いた気がした。

その後、高島は戦後高度経済成長を支えた石炭エネルギーの名誉・象徴として、そして今や明治初期の石炭産業の世界遺産候補として軍艦島（端島）と揃って国から世界から正式に認められようとしている。100年経ってようやく日の目を見ることになるのだ。

なんと皮肉な巡り合わせなのだろう。高島は戦後復興という国や国民からの使命そして期待を一身に受けながら海底地下3,000mの真っ暗闇の高温多湿の抗内で100年以上黙々と働いて来た、まるで親父たちそのものだった。そうやって日本の高度経済成長を支え続けてきたのだ。

筆者はなんと親知らずな、いや親不孝な人間なのだろう。住んでいる時は一切感謝も尊敬の念も抱かず、ぬくぬくと島の中で外敵から守られて安心しきって、豊かな生活を心行くまで享受してきた。それなのに、ただひたすらその島から離れることのみを願っていた。本土には、もっと上品で良質な文化や夢があると。

高島は、いま静かに眠っている。大きな使命を終えて、その痛い腰をゆっくり

と伸ばして静かにたたずんでいるようだ。往時の建物、道路はすたれ廃墟化が進んでいる。端島は既に無人の廃墟の島となった。先に亡くなった弟をやさしく見守りながら長い労働をやりおえた老犬のようだ。

高島は「眠っている」と表現したが、今は重労働はやめてそのかわり自然と優しく接しているという方が正しいかもしれない。周りの人達に暖かく見守られながら、トマトの栽培やヒラメの養殖など、また新たな明日に向かってこつこつと働いているのだ。昔の栄光や威厳を捨てて、たおやかに、したたかに周りの自然環境に溶け込んで別の姿に生まれ変わろうとしている。実にかわいくて面映ゆい。

御苦労さま。本当にお疲れさま。あなたが日本の戦後経済をぐいぐい引っ張っていたなんてそのころは露程も知らなかった。あなたは本当に勤勉で寡黙に体ひとつで子供たちを育て、そして巣立っていくのを見つめ続けていた。今年2月に開催された世界遺産会議で、「明治日本の産業革命遺産」として高島、端島兄弟そろって正式推薦された。大変な勲章だ。あなたや親父たちの功績は、本当に偉大だ。今はきっぱり言える。高島の親父さん、本当にありがとう。そしてゆっくり休んでください。子供たちは誰ひとりもあなたを忘れてはいない。皆懐かしくて恋しくてたまらんとです。



高島地図*4



高島遠景*5

昭和61年3月、それまで孤軍奮闘してきた高島もとうとう矢尽き刀折れて閉山となった。その翌日、あなたと家族の生き残りのために労働組合の代表として最後まで戦った書記長が自ら命を捧げた。何とも痛ましく悲しかったことであろう。2万人近くの人々は、皆あなたと名残を惜しむ暇もなく慌ただしく去って行った。

あなたは実にさびしかったであろう。しかし、ありがたいことにあなたにはそばでずっと静かに見守っている数少ない仲間がいる。数こそ少なくなったが本当の家族がいる。常にいつも寄り添っている姿はまるで墓守のようである。なんとありがたいことだろう。彼らも島から離れ去っていった僕たちを親父と同様、優し

く言葉をかけてくれる。

故郷は遠くにありて思うもの。しかし、故郷は近くで見守る人が必ずいる。今はただうらやましく郷愁が万感胸に迫る思いがある。長崎の大海原のはるか彼方

に、緑なす野母の山並みに今も囲まれて静かにたたずむ故郷、高島が見える。

親父さん、会いたいよ。必ず戻ってきます。昔の仲間たちと一緒に。それまで、さようなら。

【出典】

- *1 長崎市営高島光町住宅
<http://www.city.nagasaki.lg.jp/sumai/620000/621000/p003807.html>
- *2 去華就実と郷土の先覚者たち 第15回高取伊好(上)
<http://www.miyajima-soy.co.jp/kyokua/shazel15/shazel15.htm>
- *3 キャノンギャラリー 丹野 章 写真展：地底のヒーローたち
- *4 日本の島へ行こう 長崎県の島 高島
<http://imagic.qee.jp/sima4/nagasaki/takasimatakasima.html>
- *5 光と影の記憶—高島・端島—高島出版・映像
<http://goheita.blog6.fc2.com/blog-entry-62.html>